

教職大学院における国際バカロレア教員養成のための カリキュラムデザイン

— 国際バカロレア教育の入門に着目して —

藤野 智子（東京学芸大学）

1. 研究の目的

1-1. 研究の背景

東京学芸大学は、教職大学院（専門職学位課程）において、国際バカロレア（International Baccalaureate 以下 IB）教員養成のプログラムを国内で初めて開設し、2019 年 4 月から「国際バカロレア教員養成特別プログラム（IB Teachers Training Program）以下 IBTTP」を開始した。このプログラム設置には、主に二つの背景があると考えられる。

一つ目は、政府や文部科学省のグローバル人材育成の教育施策の一つの方策として導入された IB 教育が、国内の一条校に普及し始めていること、そしてそれに伴って IB 教育を実践する教員を養成することが喫緊の課題としてあることである。教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について」第三次提言（2013 年 5 月 28 日）や「日本再興戦略 -JAPAN is BACK-」（2013 年 6 月 14 日）において「国際バカロレア認定校等の大幅な増加を目指す（2018 年までに 200 校）。」と閣議決定されたことは、IB 教育推進に大きな意味を持つ。まち・ひと・しごと創生総合戦略（2015 年 12 月 22 日閣議決定）や「未来投資戦略 2018 —「Society 5.0」「データ駆動型社会」への変革—」（2018 年 6 月 15 日）でも「国際バカロレア認定校等を 2020 年度までに 200 校以上」と提言された⁽¹⁾。また、国の予算措置により IB 機構が発行する IB 関係書類の一部が和訳されたこと、IB Educator Network (IBEN) が主催する IB ワークショップへの教員研修参加費への財政的支援が行われたこと、一条校の教育課程の特例措置が設定されたこと、ディプロマ・プログラム (DP) の授業や試験を一部日本語で実施できるようになったことなど、日本の一条校への IB 教育導入をより可能にした⁽²⁾。文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムの調査によれば、日本で IB 教育を行っている認定校等数は 150 校、学校教育法第 1 条に規定されている学校は 39 校（2019 年 11 月 11 日現在）に及ぶ。今後も国内の IB 認定校の数は増加していくことが予想され、IB 教育を実践できる十分な質を備えた教員を確保する必要がある。そのため、東京学芸大学は IB 教員養成に本格的に取り組むこととなった。

二つ目の背景は、「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」（2017 年 8 月 29 日）の報告に示されているように、教員養成大学およびその附属学校はその存在意義・役割を果たすために、これまで以上に明確な特徴を出すことが求められていることである。東京学芸大学附属国際中等教育学校は、2007 年に附属大泉中学校と附属高等学校大泉校舎を統合再編され開校した。2010 年に中等教育プログラム (MYP)、2015 年にはディプロマ・プログラム (DP) に国公立で初めて認定された学校である。地域に貢献する教育モデル校として、教育実践研究を広く公開し、教科の授業計画・指導方法・評価、生徒の学習活動への取り組み等が参考になったとの高い評価を得ている⁽³⁾。さらに学校は、日常的な現職教員研修の場としてその役割を果たす。2014 年度以降 2018 年度までで延べ 28 名の IB 研修派遣教員を受け入れた。派遣教員は長期研修終

了後、各地域の教育委員会や学校で IB 校設立準備等に携わっている。2018 年度末、受け入れ、視察等により IB 認定校等へとつながった学校は 16 校であった⁽⁴⁾。IBTTP においては、IB 研修校として IB 教員養成の重要な役割を担うこととなる。

一方、東京学芸大学は、2017 年度より多言語多文化サブコース等の学部生対象に「IB 教育論」、教職大学院では 2018 年度に「IB・国際教育研究」を開講し、IB 教育に関する授業を通して、グローバルな視野をもつ生徒の育成を目指した教員養成に取り組んできた。2012 年度より開始された HATO プロジェクト^(注1)「IB 教育プロジェクト」ではグローバル人材育成を目指す教員養成プログラムの開発が行われ、IB 教育研究を後押しした。

2017 年 10 月、国際バカロレア機構の訪問審査が行われた。国の教員養成に関する基幹大学であること、IB 教員養成に必要な実践校を附属学校として持っていること、現在行われている教職大学院での授業内容が、IB が示す IB 教員養成課題と大いに関連していること等が認められ、2018 年 4 月に IB 教員認定 (International Baccalaureate Educator Certificates 以下 IBEC) を申請できる高等教育機関として認定を受けた。

以上のような社会的背景と研究成果により、大学、教職大学院、附属学校が連携して、IB 教員養成に携わることとなった。

1-2. 目的の設定

IB 教育に対応する教員養成に関する研究は、海外大学における IB 教員養成に関する国際比較研究が行われている。国内の高等教育機関として最初に IB 教員養成を行った玉川大学大学院の事例を含めて、東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センターが期待するように、「国内で行われている教員養成の高度化の研究・実践に有効な視点・情報を提供する」ものである⁽⁵⁾。

教職大学院における IB 教員養成については、国内で初めて設置されたことから、IBTTP における IB 教員養成の実証研究が求められる。このことから、本研究の目的は、教職大学院における国際バカロレア教員養成のカリキュラムを構築することである。本稿では、2019 年度春学期に実施された授業「IB 教育入門」のカリキュラムについて考察する。

2. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では以下の方法を選択する。

(1) 資料調査

- (1) IB 教育に関する概要をまとめる。
- (2) IB 教員養成に関する概要をまとめる。
- (3) 2019 年度春学期、東京学芸大学教職大学院 IBTTP に設置された「IB 教育入門」の概要を記録整理する。

(2) アンケート調査

2019 年度「IB 教育入門」履修者に対して「IB 教員養成の成果の追跡と深化」アンケートを実施する。以下の 3 つの視点に関わる質問を用意する。

- (1) 「IB 教育入門」科目設置のニーズを明らかにする。
- (2) 「IB 教育入門」の授業効果を明らかにする。
- (3) 教職大学院における IBTTP の課題を明らかにする

(3) 分析と考察

- (1) 「IB 教育入門」履修者対象のアンケートの結果分析を行う。
- (2) 「IB 教育入門」のカリキュラムデザインについて考察を行う。
- (3) IBTP のカリキュラムデザインについて考察する。

3. 研究の成果

3-1. 資料調査

(1) IB 教育の概要

IB 教育とは、スイスのジュネーブに本部を置く国際バカロレア機構（International Baccalaureate Organization 以下 IBO）が提供するプログラムに準拠して、IBO から認定を受けた学校が行う教育である。IB 教育は、国の違いによる教育内容の違いや教育システムの違いを超えて、国際的な視野をもつ人間を育成することと、国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与え大学進学へのルートを確保することを目的として開発された。IB 教育は、グローバルな視点から未来に対して責任ある行動をとれる態度やスキルを育むことを目的とする⁽⁶⁾。IBO は 1968 年に DP を創設し、現在は 4 つのプログラム（表 1）を提供している。一つの学校で複数のプログラムを実施している学校もある。IB 教育は世界 153 以上の国・地域 5,170 校（2019 年 9 月 29 日現在）で実施されている⁽⁷⁾。

『IB の教育とは』では次のように説明している。いずれのプログラムも「共通の価値観に根ざしていて、生涯学習者として、複雑かつ相互に絡み合った世界を理解するだけでなく、その世界に対して前向きな影響を及ぼせるよう、生徒を育てていくことを重視しています。これらの目標は、以下に挙げる IB の意欲的な使命に要約されています。国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。この目的のため、IB は、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。IB のプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。」そして、IB の使命と理念を形作り推進するため、IB 教員には「国際的な視野」「IB の学習者像」「幅広く、バランスのとれた、概念的で、相互につながりのあるカリキュラム」「指導のアプローチ」と「学習のアプローチ」の IB のすべてのプログラムの中心となる 4 つの基本的かつ相互に関係する要素を探究することを求めている⁽⁸⁾。

表 1 IB 教育のプログラム

プログラム名（略称）	日本語名称	対象年齢
Primary Years Programme (PYP)	初等教育プログラム	3～12 歳
Middle Years Programme (MYP)	中等教育プログラム	11～16 歳
Diploma Programme (DP)	ディプロマプログラム	16～19 歳
Career-related Programme (CP)	キャリア関連プログラム	16～19 歳

出所：IBO ウェブサイト <https://www.ibo.org/programmes>

(2) IB 教員養成の概要

IBO が認める IBEC を修了すると、以下の教員資格が取得可能となる。2019 年 9 月時点で世界では 45、国内は 7 つの高等教育機関が取り組んでいる⁽⁹⁾。

IB Certificate in Teaching and Learning (IBCTL)

IB Advanced Certificate in Teaching and Learning Research (IBACTLR)

IB Certificate in Leadership Practice (IBCLP)

IB Advanced Certificate in Leadership Research (IBACLR)

IBTTP は IBCTL 取得を目指す。IB 教員資格を取得すると、IB 校 (MYP/DP 別) において必要な、すべての領域を担当できる IB 教員 (教科・コア科目・管理職・コーディネーター等) としての申請資格を得ることになる。IBEN が主催する IB ワークショップにおいても教科・カテゴリー別に IB 教員資格を取得可能⁽¹⁰⁾だが、長期間にわたって理論と実践を往還させ、IBEC で示される「コース設計および授業実施の枠組み」からカリキュラム編成プロセス、指導および学習、評価および学習、専門的学習の 4 つの領域を探究する⁽¹⁰⁾。この中では、さらに A～M の 16 の知識の領域が提示されている^(注2)。

(3) 教職大学院 IBTTP に設置された「IB 教育入門」の概要

(i) 教職大学院カリキュラム (教育実践専門職高度化専攻) 概要⁽¹¹⁾

(a) 目的

教科等の指導や現代的教育課題に対する取組において、教職員・保護者・地域の人々・専門家と協働して問題解決にあたることのできる高度な実践的指導力を備え、学校や地域の教育活動においてリーダーとなる教員 (スクールリーダー) を養成すること。

(b) 開設プログラム (1 学年定員 210 名)

学校組織マネジメント、総合教育実践プログラム、教科領域指導プログラム、特別支援教育高度化プログラム、教育プロジェクトプログラム

(c) カリキュラムの枠組み (46 単位以上修得)

- ① 専攻科目 5 科目必修 (10 単位)
- ② プログラム科目 3 科目必修 (6 単位)
- ③ 高度選択科目 (10 単位多様な科目から選択可能 IB 関連 5 科目設置)
- ④ 教職専門実習 (10 単位)
- ⑤ 課題研究 (4 単位)

(ii) IBTTP カリキュラム概要⁽¹²⁾

(a) 開設科目 (高度選択科目内に設置。各 2 単位)

- ・ 共通科目: 「IB 教育入門」 (春学期)
- ・ MYP 教員認定科目: 「IBMYP 教育概論」 「日本の MYP 教育実践」 (秋学期)
- ・ DP 教員認定科目: 「IBDP 教育概論」 「日本の DP 教育実践」 (秋学期)

「IB 教育入門」は教職大学院すべての学生が履修できる。秋学期 2 科目履修については IB 校研修運営上、人数制限 (30 名程度) がある。2 年間に渡って MYP 及び DP 教員資格取得可能だが、2 年目は人数枠に空きがある場合のみとする。

(b) IB 校等研修

上記の IB 関連科目の履修に加えて、IB 校における授業見学や経験豊かな教員からの助

言等によって、IB プログラムにおける指導法、評価方法、学校運営に在り方について理解を深める。研修時間は 30 時間以上とする。附属国際中等教育学校における研修（18 時間程度）以外に、他の IB 校での授業見学や研究会等（12 時間以上）に参加することを推奨している。

（iii）春学期「IB 教育入門」の授業概要

（a）概要

IB 教育全般についての理解を深め、IB 教育実践に必要な基礎的スキルの習得を目的とする。授業構成は、講義と演習・参加型ワークショップの繰り返しにより、スキルアップを目指していく。IB 教育の歴史にも触れ、必要性和学びの変化について理解を深める。

（b）到達目標

学卒院生：

- ・ IB 教育（PYP・MYP・DP）の目標・理念を理解し、学習指導要領との比較ができる
- ・ IB 教育の構造と目指す生徒像（10 の学習者像）を理解し、その指導方法を提案できる
- ・ IB 教育実践に必要な年間教育課程を学年別に作成し、生徒の成長と共に目指す学習成果の変化を理解できる
- ・ IB 教育実践に必要なユニットプランナーを複数作成し、従来の単元設計案と比較して、特色を理解する
- ・ IB による評価例を用いて、実践的な評価に関するディスカッションができる

現職院生：

- ・ IB 教育（PYP・MYP・DP）の目標・理念を理解し、学習指導要領との比較し運用できる
- ・ IB 教育の構造と目指す生徒像（10 の学習者像）を理解し、その指導方法を提案するとともに改善策を検討できる
- ・ IB 教育実践に必要な年間教育課程を学年別に作成し、生徒の成長と共に目指す学習成果の変化を理解し改善点を指摘できる
- ・ IB 教育実践に必要なユニットプランナーを複数作成し、従来の単元設計案と比較するとともに、それぞれのメリット・デメリットを指摘できる
- ・ IB による評価例を用いて、実践的な評価に関するディスカッションができる

（c）2019 年度春学期「IB 教育入門」受講者数

プログラム名等		学卒生（人）	現職教員（人）	合計（人）
M1	学校組織マネジメント	0	7	7
	総合教育実践	18	10	28
	教科領域指導	57	6	63
	特別支援教育高度化	2	0	2
	教育プロジェクト	2	1	3
M1	修士課程	5	0	5
M2	教職大学院 2 年生	2	1	3
B4	学部 4 年生（先取履修）	5	0	5
合計		91	25	116

(d) 2019 年度春学期「IB 教育入門」授業計画実践

	テーマ・内容			「コース設計および授業実践の枠組」
第 1 回	IB の歴史概要・日本における IB 事情・オリエンテーション			B カリキュラムの枠組み（原則、構成、および実践）
第 2 回	IB の歴史・理念に関する理論・IB の学習者像			A 国際教育と IB プログラムの役割および理念
第 3 回	○概念学習の理論 ○IB の概要 ・日本における IB 教育事情、認定までのプロセス指導の方法（アプローチ）から、概念学習・探究・ローカルおよびグローバルな文脈・奉仕活動			E 学習理論、方策、およびスタイル A 国際教育と IB プログラムの役割および理念 B カリキュラムの枠組み
第 4 回	○IB 認定校の実践 ○IB 関連情報 Web サイト（IBWS の案内）			B カリキュラムの枠組み C カリキュラムと指導の設計
第 5～7 回	テーマ A	テーマ B	テーマ C	○テーマ A：ATL C カリキュラムと指導の設計 F 指導方法および学習支援 N 振り返りの実践の原則とプロセス ○テーマ B：探究を基盤とした差異化された教授法と学習法 F 指導方法および学習支援 G 差異化された指導方策 O 協働作業：立案、実施、および評価 ○テーマ C：学習評価 I 評価の原則 J 評価方策の開発 K 評価課題およびルーブリックの作成 M 効果的なフィードバック
第 8～10 回	○ATL	○探究を基盤とした差異化された教授法と学習法	○学習評価の在り方	
第 11～13 回	学習の方法（アプローチ） ・IB 校の実践例をみながら ATL 体験		・評価の目的・原則・基本的な考え方 ・評価の方法（評価規準・基準、目標・評価・指導の一体化、形成的評価・総括的評価） ・評価の妥当性・信頼性	
各 3 回 テーマ授業	課題： ATL 形成を目的とした授業構想案等	課題： 効果的な differentiation についての考察等	課題： 学習評価の工夫に関する方策等	
第 14 回	特別講演「IB 教育実践」古家正暢氏（元附属国際中等教育学校社会科教諭、現帝京大学教授）			C カリキュラムと指導の設計 F 指導方法および学習支援
第 15 回	最終課題「IB の学習者像」を目指した取り組みに関する小論文			C カリキュラムと指導の設計 F 指導方法および学習支援

3-2. アンケート調査

以下の要領でアンケートを実施した。

目的：教職大学院における授業・研修での学びが実際にどのように活用、参考にされるかを把握し、さらに先進的な教育及び研究を推進するため。

対象：春学期「IB 教育入門」受講者 116 名 回答者数 60 名（回収率 51.7%）

時期：令和元（2019）年 8 月 1 日（木）～31 日（土）

方法：Office365 の Forms を利用

質問の設定：

(1) 「IB 教育入門」科目設置のニーズを明らかにする。問 1（後述）

(2) 「IB 教育入門」の授業効果を明らかにする。問 2、問 3、問 6（後述）

問 4 「IB 教育入門」の授業から得た学びについて、以下の項目^(注2)についてどの程度理解しましたか。

（「IB 教育入門」では取り扱っていない内容もあります。その場合は「わからない」をチェックしてください。）

(3) 教職大学院における IBTP の課題を明らかにする。

問 5 「IB 教育入門」以外の、教職大学院春学期において受講した他の授業で、以下の項目について学んだという認識があれば☑とその科目名を明記してください。この場合、IB と関連していない内容でもかまいません。（例 B カリキュラムの枠組み（原則、構成、および実践） ☑（カリキュラム・デザイン））

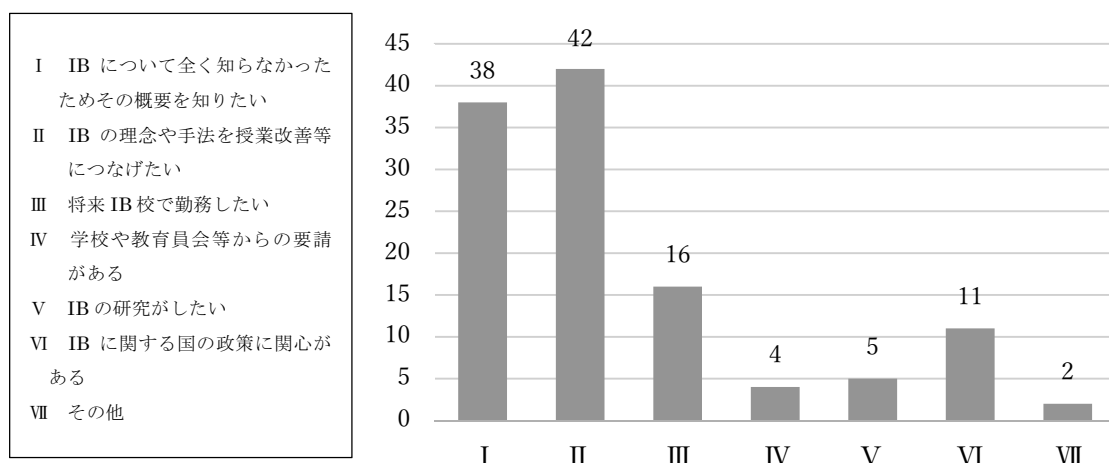
質問の処理：

- ・問 4 および問 5 については、本稿では春学期の限定された範囲で考察を行った。
- ・問 3 および問 6 の自由記述回答については記載されたキーワードをカウントした。
- ・問 4 および問 5 については、IBEC の提示する「コース設計および授業実践の枠組み」の 16 の知識の領域^(注2)を項目として提示した。

3-3. 分析と考察

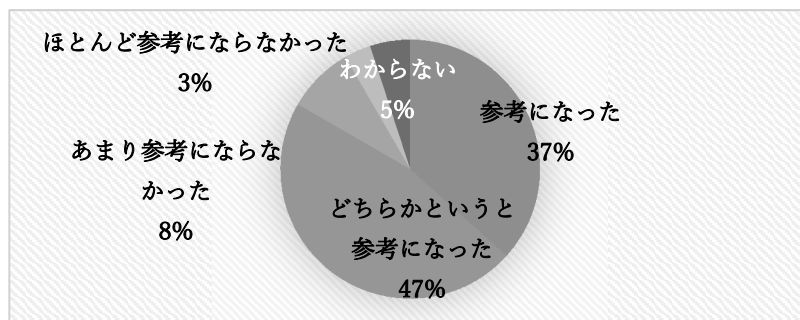
(1) 「IB 教育入門」履修者対象のアンケートの結果分析を行う。

問 1 「IB 教育入門」を履修した理由は何ですか。（複数回答可）



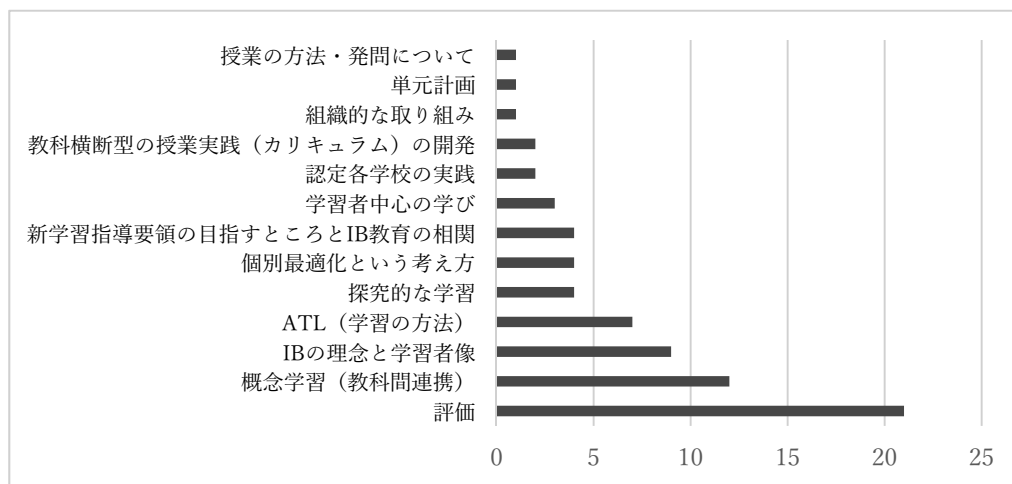
・回答者の 70%が「IB の理念や手法を授業改善につなげたい」、63%が「IB の概要を知りたい」と回答した。25%は IB 校での勤務を希望し、約 10%が IB 研究を考えている。宮城県教育委員会より 2 名、広島県教育委員会より 1 名派遣があった。

問2 「IB 教育入門」の授業で取り扱った内容と方法は、今後の教育活動、授業設計や改善にどの程度参考になりましたか。

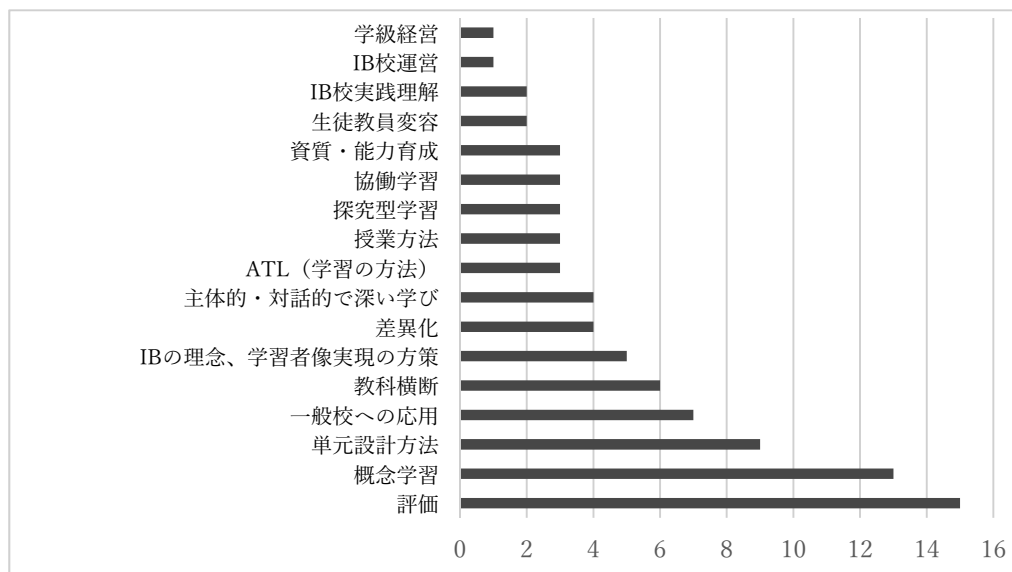


・回答者の84%が肯定的な意見、16%が否定的または不明と回答した。

問3 問2で「参考になった」「どちらかという参考になった」のはどのような内容・方法ですか。どのように活用したいですか。



問6 「IB 教育入門」を受講した結果、今後どのような学びを拡張していきたいと思えますか。



(2) 「IB 教育入門」のカリキュラムデザインについて考察する

① 「IB 教育入門」科目設置のニーズを明らかにする。

・教職大学院 1 年生 190 名の中で高度専門科目として選択した学生は 103 名（修士・4 年生・院 2 年生を除く）、教職大学院生 1 年生の約 54%が「IB 教育入門」を履修した。国の教育政策、各都道府県の公立学校等で IB 校設立や情報収集の動きなどにより、IB 教育への関心が高まっていることが要因と思われる。教職大学院において創造的な改革への知見を広げる機会を提供できた。

・受講理由（問 1）については、「IB の理念や手法を活用して授業改善につなげたい」が 70%で一番多かった。新学習指導要領（小中学校平成 29 年告示・高等学校平成 30 年告示）への対応として、理念や基本的な考え方に親和性が高い IB 教育を活用したいという意識があると思われる^{（注 3）}。

・今後の学びの拡張（問 6）については、「学習評価の在り方」「カリキュラム・マネジメントを意識した資質・能力育成」「教科横断的なカリキュラムデザイン」に関心が高く、IB 校以外の一般の学校への応用を期待していることがわかった。「IB 教育入門」では、IB 教育の特徴と、新学習指導要領の基本的な考え方と関連ある上記のテーマを選択したことで、多くの受講者のニーズにあった授業内容を提供できたと考える。

② 「IB 教育入門」の授業効果を明らかにする。

・「IB 教育入門」についてはアンケート回答者のうち 84%が「参考になった」「どちらかという参考になった」（問 2）の肯定的な意見を示した。一定の成果があったと思われるが、「参考になった」という意見が 3 割強にとどまっていることは課題である。

・第 5 回から第 13 回では 3 ラウンドで 3 つのグループ（38～40 名/クラス）に分けて、3 名の IB 担当教員がそれぞれのテーマで授業を担当した。テーマは IBEC の「コース設計および授業実践の枠組」を踏まえ、新学習指導要領の理念と関連がある「テーマ A：全人教育を基盤に ATL（学習の方法（アプローチ））を踏まえて資質・能力育成を目指した教科横断的な視点からの単元設計」、「テーマ B：探究を基盤とした差異化された教授法と学習法」、「テーマ C：学習評価の在り方」とした。各テーマに関する文献や IB のガイドを活用して理論を学び、多面的多角的な視点からの議論を通してテーマ理解を深めた。それぞれ 3 回目には、具体的な実践方策を考案するという評価課題を提示した。指導案作成、ディスカッション、知識理解テストおよび課題作文といった多様な形式で用意した。

「IB 教育入門」が参考になった具体例（問 3）および今後の学びを拡張したいこと（問 6）であげられたキーワードに、このテーマ学習で扱った「学習評価」「概念学習」「単元設計」「ATL」に関するものが多かったことは、理論と実践を往還させて協働的に対話しあう機会と複数の評価課題のために各自が学習を深めたことが要因と考える。

・「概念学習」に関心が高い（問 3・問 6）ことの理由として、教職大学院専攻科目の「カリキュラムデザイン」を IB 担当教員が担当し、同様のテーマを取り扱ったことが一部影響していると思われる。教職大学院の教科間連携の視点からカリキュラムデザインすることが求められる。

③ 教職大学院における IBTTP の課題を明らかにする

・IBEC の「コース設計および授業実践の枠組」に関連した授業内容が、「IB 教育入門」以外の科目でどのように関わったかを問うた（問 5）。春学期では専攻科目「カリキュラ

ムデザイン」を挙げた受講生が多い一方で、他の授業科目を挙げる受講生は少なかった。秋学期後に結論付けたいが、IB 関連科目において IBEC の指定項目を網羅する必要がある。

- ・ IBTTP 担当者がすべての教科専門指導を行うことは難しい。秋学期の IB 校研修が担うところが大きい、教科プログラムとの連携を検討したい。

(3) IBTTP のカリキュラムデザインについて考察する。

① 授業内容と方法

- ・ 教員養成教育では、探究的に学ぶ意欲・態度と技術の伸長をねらいとする。各自が理論と実践を融合させて、IB 教育実践の改善や開発につなげることを促すような、協働的で探究的な学びの環境を設定する必要がある。これは、IB 教育が目指す指導のアプローチでもあり、生徒が学ぶスタイルを、教師も学び手として経験することが大切と考える。

- ・ 授業では複数の教員が多様な指導・活動方法を提示し、各評価課題において多様な表出を尊重するよう考慮した。IB が重視するインクルーシブ教育を教員養成カリキュラムにおいても充実させることが肝要である⁽¹³⁾。

- ・ 履修者が 116 名という大人数だったため、講義形式にならざるをえない場面もあり、一人ひとりのニーズにこたえることが難しかった。個別にフィードバックを行ったりさらに深めたりすることができる個別最適化の指導と評価の工夫が、児童生徒に対して行われるのと同様に行われるべきである。

- ・ 「Approaches to Teaching (ATL:指導の方法 (アプローチ))」の 6 つの教育原理の中から「探究を基盤とした指導」「概念理解に重点を置いた指導」「評価を取り入れた指導」⁽¹⁴⁾の内容を学ぶカリキュラムは有効であった。それらは新学習指導要領実践に必要な視点であり、受講者の多くが参考になった(問2)、学びを拡張していきたい(問6)という肯定的意見を示したことが理由である。一方、「地域的な文脈とグローバルな文脈において展開される指導」「効果的なチームワークと協働を重視する指導」「学習への障壁を取り除くデザイン」について「IB 教育入門」では取り扱うことができなかった。シラバスについて継続的に検討する。

- ・ 2019 年 7 月下旬、IB 教育実践者による「学び続ける教員の在り方」をテーマにした特別講話を行った。「講話から感じたこと・考えたこと」及び「教育現場または自分自身に問う探究的な問いの設定」を問うたところ「生涯学習者としての教員の在り方」「学校・教員の役割」「学びの本質」について高い関心がみられた。人的資源を活用したカリキュラムマネジメントの有効性が示される機会を提供すべきである。

② 学生および現職教員支援

- ・ IB 研究のために 2 つの教育委員会より 3 名の現職教員が派遣された。各県の目的目標を見極め、連携支援していくシステム構築が求められる。

- ・ 教職大学院学生および現職教員は、スクールリーダーとなることが求められている。教育現場で自ら IB の趣旨を生かした教育実践を行うだけでなく、校内の他の教員にも研修効果が期待できるようなカリキュラムを工夫する。

③ プログラムの運営方法

- ・ IB 校研修運営上、秋学期は人数制限を設けた。4 種類の評価課題の成績により選抜が行われ、すべての履修希望者の要望に応えることができなかった。

・IB 特別プログラム実施会議は教職大学院長（副学長）1 名、教育実践専門職高度化専攻代表、学務課長、IB 科目担当専任教員で構成されるが、2019 年度においては、その他関係担当者も参加した。月 1 回情報を共有し、教育委員会・附属学校との協定・連携、IBO との連絡調整、書類作成、学生の動向把握等、関係部署と連携し課題に対応した。

・授業担当者は毎授業後、振り返りの時間を設定し、教員養成のためのカリキュラム研究を行ったことは有意義だった。専任教員もまた「振り返りができる人」「探究する人」「コミュニケーションができる人」「知識のある人」の IB の学習者像を目指し、生涯学習者として IB 教員養成のあり方を探究し続けることが求められる。

4. 本研究の課題

・受講生のアンケートについて回答率が全履修者の半分程度であったことから、アンケート実施方法について改善の必要がある。より効果的な実証研究方法についても検討しなくてはならない。

・IB 科目を担当したすべての IB 専任教員による考察が不足していた。多角的な視点、通年にわたる分析、継続的なデータ収集を行わなくてはならない。

・教職大学院における教員養成のためのカリキュラムデザインの提案であることから、教職大学院における他の授業との関係について分析・考察が必要である。

5. 今後の研究の課題

認定 3 年後（2020 年度末）IBEC 評価訪問のための資料作成へつなぎ、包括的なカリキュラムデザインを提案するためには、IBEC の提示する「コース設計および授業実践の枠組み」の沿ったカリキュラムマップ作成が必要である。

教職大学院の教科領域指導プログラム等のカリキュラム連携によって教員養成を行うことの効果、附属学校や外部機関と連携した研修のあり方、IB 校に研修派遣された教員の変容、理論と実践の往還を導く教材開発、IBTP 受講生が教育現場にもたらす貢献の成果等、多角的な視点から IB 教員養成教育のあり方として効果的なカリキュラムデザインの研究をすすめたい。

筆者は、この IB 教員養成について、国と IB の教育の目指す方向性に共通する点が多いことから一般の学校で勤務する教員育成も視野に入れることができると考える。IBTP カリキュラムが、求められる学校教育に主体的に携わる教員を支援する一つの手立てとなりうるか、その有効性についても考究したい。

引用文献・注：

- (1) 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム「日本における IB 教育 国際バカロレアの推進に関する提言等」<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/proposals/>（2019.9.11 閲覧）
- (2) 渋谷真樹（2019）「国際バカロレアと「グローバル人材」育成—「国際的な視野をもつ人間の育成」と教育資格の国際通用性を中心に—」『留学交流 2019 年 1 月号 Vol.94』
- (3) 東京学芸大学附属国際中等教育学校特別研究推進委員会（2019）「国立大学附属学校としての存在意義・役割-平成 29（2017）年度・平成 30（2018）年度上半期アンケート結果より」『国際中等教育研究』第 16 号 pp.153-166.

- (4) 総合教育政策局教育人材政策課教員養成企画室 (2019 年 5 月 29 日)「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する取組状況について—Vol.2 グッドプラクティスの共有と発信に向けた事例集」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/077/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2019/05/29/1416730_01.pdf(2019.12.4 閲覧)
- (5) 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター (2016)『教員養成課程におけるグローバル次元の研究～IB 教員養成の国際比較～(報告書)』
- (6) 星野あゆみ, 佐々木幸寿 (2019)「国際バカロレア教育 (IB 教育) の普及と教員の資質向上」『SYNAPSE』ジダイ社 pp.28-32.
- (7) IBO Find an IB World School <https://www.ibo.org/programmes/find-an-ib-school/> (2019.9.29 閲覧)
- (8) 国際バカロレア機構 (2019)『国際バカロレア (IB) の教育とは?』〔2019 年 11 月に発行の英文原本 What is an IB education? の日本語版〕
- (9) 国際バカロレア機構 *IB EDUCATOR AND LEADERSHIP CERTIFICATES UNIVERSITY DIRECTORY 2019* Universities at a glance <https://www.ibo.org/globalassets/professional-development/ib-university-directory-2019-en.pdf> (2019.9.9 閲覧)
- (10) IBO Professional development <https://www.ibo.org/professional-development/> (2019.9.29 閲覧)
- (11) 東京学芸大学 www.u-gakugei.ac.jp/~graduate/kyosyoku/b_study/12subject.html (2019.10.7 閲覧)
- (12) 東京学芸大学教職大学院 (2019)『2019 年度国際バカロレア教員養成特別プログラム』
- (13) 国際バカロレア機構 (2010)『プログラムの基準と実践要綱』〔2014 年に 1 月に発行の英文原本 Programme Standards and Practices の日本語版〕
- (14) 国際バカロレア機構 (2014)『MYP : 原則から実践へ』〔2014 年 5 月発行、2017 年 9 月改訂の英文原本 MYP : From Principles into Practice の日本語版〕
- (注 1) 国立教員養成系単科大学のうち大規模な 4 大学 (北海道教育大学、東京学芸大学、愛知教育大学、大阪教育大学) を中心に、日本の教員養成教育の諸課題に対応する機構が協働設置され、全国の教員養成系大学・学部との交流の拠点となった。
 IB 教育プロジェクト <http://www.u-gakugei.ac.jp/~tcenter/project/IB.html> (2019.9.16 閲覧)
- (注 2) A. 国際教育と IB プログラムの役割および理念 B. カリキュラムの枠組み (原則、構成、および実践) C. カリキュラムと指導の設計 D. カリキュラム・アーティキュレーション E. 学習理論、方策、およびスタイル F. 指導方法および学習支援 G. 差異化された指導方策 H. 指導・学習教材の選択および評価 I. 評価の原則 J. 評価方策の開発 K. 評価課題およびルーブリックの作成 L. 評価の差異化 M. 効果的なフィードバック N. 振り返りの実践の原則とプロセス O. 協働作業 : 立案、実施、および評価 P. 実践コミュニティの構築をサポートする ICT の活用
- (注 3) 新学習指導要領基本的な考え方には「かつてなかったような急速かつ激しい変化が進行する社会を一人一人の人間が主体的・創造的に生き抜いていくために、教育に求められているのは、子どもたちに、基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」をはぐくむことである。」とある。文科省大臣官房国際課国際協力企画室が指摘するように、IB の使命「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」と親和性が高い。